

## 奇才 江戸絵画の冒険者たち

東京都江戸東京博物館（東京・両国） 2020.06.02～06.21

山口県立美術館 07.07～08.30 あべのハルカス美術館 09.12～11.08

本展は、美術展の中でもひとときわ高い人気を誇る既存の江戸時代絵画史を変換する画期的な企画展として注目され、このような観点から流派や様式、有名、無名を問わず、斬新な表現に挑んだ「奇才35人の作品」を一堂に会して、その表現の奥深さを探ろうという企画である。

葛飾北斎 かんまちまつりやたいてんじょううえ 《上町祭屋台天井画 めなみ 女浪》 一面桐板着色 1845（弘化2）年 右

画伯が86歳時に、豪商の招聘により信州・小布施を訪れて描いた「男浪」と一対をなす祭屋台の天井画の「女浪」で、襲いくる波濤が渦巻く構図は見上げていると宇宙に飲み込まれていくような感覚になるような見事な作品である。

鈴木其一 きいつ 《紅葉狩図 もみじがりずたこ 凧》 紙本着色 19世紀（江戸時代） 中

画伯は、大名家の御用絵師であると共に「凧絵」や「羽子板絵」を制作する町絵師の一面も持っていた。モチーフは、能「紅葉狩」に登場する鬼女の面をあしらった凧で、一面の紅葉と八重桜を背景にした何とも贅沢で、盤石の面と背後には鬼が持つ打杖の構図と強烈な色彩対比と造形と捉え方が非常に斬新である。

絵金 えきん 《伊達競 だてくらべおくにかぶき 阿国戯場 かさね 累》 二曲一隻 紙本着色 19世紀（江戸時代） 左

画伯は幕末・土佐で活躍した浮世絵師で、画面中央の女性「累」が怨念で顔が醜く変わり、「夫」との仲を誤解して「歌方娘」に食ってかかる場面である。

芝居絵は、髪を逆上させた凄まじい表現と「累」の躍動感あふれる動きに、「累」を止めようとする「夫」の必死の形相も見応えのある歌舞伎の舞台が彷彿とする。

